

2015年度 自己点検・評価【社会学部】

C票

<目標、行動計画>策定シート

作成日:2015年11月6日

責任者	社会学部長	作成部局	社会学部
-----	-------	------	------

2021年度に向けた教育研究目標

【A票:教育研究目標1】

(タイトル)

建学の精神にもとづいた人格形成を促すとともに、社会・文化・人間への深い関心を育成し、生涯にわたる主体的・能動的な学習態度を育成する。

(狙い内容)

正課教育内外を通して、“Mastery for Service”の精神について触れる機会を増やすとともに、社会・文化・人間への深い関心を刺激する知的・実践的環境を整備する。さらに、4年間を通じた演習教育と、「共同学習室」を中心にした「ピア・エデュケーション」の強力な推進によって、生涯にわたる主体的・能動的な学習態度の育成に努める。

1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)

“Mastery for Service”の精神について、授業、チャペル、学部独自の「学生交流プロジェクト」(ピア・サポート)など、正課教育内外を通して、多くの学生が触れる機会をもつ。また、社会学を中心にした正課内教育とともに、ボランティア活動などの実践を通して、社会・文化・人間への深い関心を刺激する知的・実践的環境を整備する。さらに、4年間を通じた演習教育や、「共同学習室」を通じたさまざまな「ピア・エデュケーション」プログラムに多くの学生が参加することによって、生涯にわたる主体的・能動的な学習態度を育成する条件が整う。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

人格の形成、社会への関心の育成、主体的学習態度の育成は、社会学部のすべての教育が準拠する、もともと基礎的かつ重要な教育目標である。しかしこれらの教育目標の成果は、大学における多くの他の教育目標と同様に、けっして短期的に数字に現れるような種類のものではない。したがってむしろ、これらの教育目標を達成するための、正課外の活動を含めたさまざまな活動の向上や環境の整備を進めることが、社会学部の目標となる。社会学部では、すでに2014年度より、アクティブ・ラーニングとピア・エデュケーションの拠点として「共同学習室」を設置し、主体的・能動的な学習態度の育成と、大学が掲げる「垣根なき学びと探究の共同体(ラーニングコミュニティ)」の実現に向けて、さまざまな先進的な取り組みを行なっている。またここを拠点として、「学生交流プロジェクト」(ピア・サポート)やボランティア活動にも取り組んでいる。今後も、このような先進的な取り組みを継続するとともに、より多くの学生が主体的に参加し、また学部の正課内教育ともより有機的に連携していく必要がある。

3. 達成度評価

評価指標	この教育目標は、その達成度を直接的かつ数量的に測定できる種類のものではない。したがってこの教育目標の達成度を評価する指標は、むしろこの教育目標を達成するための、(正課教育内外を通じた)さまざまな活動の向上や環境の整備(下記の行動計画)を示す指標によって、代替すべきものである。	評価尺度	A: B: C: D:
------	--	------	----------------------

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度

【A票:教育研究目標2】

(タイトル)

幅広くかつ系統的な社会学的知識・思考・技能にもとづいた、社会で求められる「社会学的想像力」を育成する。

(狙い内容)

2016年度施行の新カリキュラムは、これまでのカリキュラムが重視してきた幅広い学習内容に加えて、系統的な学習と方法(メソッド)を重視して、6つの「専攻分野」(「現代社会学」、「データ社会学」、「フィールド社会学」、「フィールド文化学」、「メディア・コミュニケーション学」、「社会心理学」)を設置する。これによって、より焦点の定まった学習を可能にするとともに、方法(メソッド)にもとづいた学習を実現し、学生が卒業後に直面するさまざまな問題に対して、一貫した方法的態度にもとづいて対応することができる「社会学的想像力」を育成する。

1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)

2020年度には、新カリキュラムが完成年度を迎える。学生は、幅広い学習内容に加えて、系統的で方法(メソッド)を重視した学習によって、社会学・社会心理学的方法(メソッド)ばかりでなく、人類学や民俗学など隣接諸科学の方法(メソッド)も含めて、それぞれの「専攻分野」で学習することが可能になる。これによってそれぞれの「専攻分野」で、より焦点の定まった学習、方法(メソッド)にもとづいた学習が実現され、さまざまな問題に対して、一貫した方法的態度にもとづいて対応することができる「社会学的想像力」の育成が進む。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

現行カリキュラム(2009年度から施行)は、3系7領域にわたる幅広い学習内容の提供を重視した反面、系統的・段階的学習の側面に問題があった。社会学部では、その反省にもとづいて、2012年度から新しいカリキュラムづくりに取り組んできた。その結果、2016年度施行の新しいカリキュラムは、これまでのカリキュラムが重視してきた幅広い学習内容に加えて、系統的な学習と方法(メソッド)を重視して、6つの「専攻分野」(「現代社会学」、「データ社会学」、「フィールド社会学」、「フィールド文化学」、「メディア・コミュニケーション学」、「社会心理学」)を設置した。これによって社会学部では、より焦点の定まった学習を可能にし、方法(メソッド)にもとづいた学習を実現することを目指しており、その結果、学生が卒業後に直面するさまざまな問題に対して、一貫した方法的態度にもとづいて対応することができる「社会学的想像力」を育成することを目標としている。

3. 達成度評価

評価指標	専攻分野と卒業論文の適合率	評価尺度	A: 80%以上 B: 70%以上80%未満 C: 60%以上70%未満 D: 60%未満
------	---------------	------	--

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
60%	60%	65%	65%	70%	75%	80%

【A票:教育研究目標3】

(タイトル)

フィールドワークを含む社会調査についての基礎的な知識と技能にもとづいた、社会で求められる「社会調査の実践力」を育成する。

(狙い内容)

2016年度施行の新カリキュラムは、社会調査関連科目の段階性を明確にするとともに、新たに「リサーチ・メソッド科目」を導入し、さらに「データ社会学専攻分野」「フィールド社会学専攻分野」「フィールド文化学専攻分野」を設置した。これによって、これまで以上に、フィールドワークを含む社会調査についての知識と技能にもとづいた、社会で求められる「社会調査の実践力」を育成する。

1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)

2020年度には、新カリキュラムが完成年度を迎える。学生は、段階的・系統的に社会調査関連科目を履修し、さらに所属する「専攻分野」で求められる「リサーチ・メソッド科目」を履修しながら、とくに「データ社会学」「フィールド社会学」「フィールド文化学」の各「専攻分野」に所属する学生は、フィールドワークを含む社会調査の知識と技能を重点的に学習することによって、これまで以上に、フィールドワークを含む社会調査についての知識と技能にもとづいた、社会で求められる「社会調査の実践力」を育成することを目指す。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

現行カリキュラム(2009年度から施行)においても、社会調査関連科目は重視していたものの(選択必修4単位)、科目の系統性・段階性の点で問題があった。そこで2016年度施行の新カリキュラムは、社会調査関連科目の段階性を明確にするとともに、新たに「リサーチ・メソッド科目」を導入し、さらに「データ社会学専攻分野」「フィールド社会学専攻分野」「フィールド文化学専攻分野」を設置した。これによって、これまで以上に、社会調査についての知識と技能にもとづいた、社会で求められる「社会調査の実践力」を育成することを目標とする。

3. 達成度評価

評価指標	卒業論文全体に占める、フィールドワークを含む社会調査にもとづいた論文の比率 「社会調査士」資格の取得者数	評価尺度	A: 40%以上/35名以上
			B: 30%以上40%未満/30名以上35名未満 C: 20%以上30%未満/20名以上30名未満 D: 20%未満/20名未満

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
20% 20名	20% 20名	20% 20名	25% 25名	30% 30名	35% 30名	40% 35名

【A票:教育研究目標4】

(タイトル)

グローバル化した現代社会で活躍できる人材を育成する。

(狙い内容)

確かな言語能力(とくに英語力)にもとづいて、異なる地域や文化を体験するとともに、グローバル化した現代社会の現状や問題点を社会的に理解することによって、多様化する現代社会で活躍できる人材を育成する。

1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)

多くの学生が、確かな言語能力(とくに英語力)を身につけ、海外への派遣(交換留学、中期留学、外国語研修等)の経験や「フュージョン(融合)プログラム」参加によって、異なる地域や文化を体験するとともに、グローバル化した現代社会の現状や問題点を社会的に理解することによって、多様化する現代社会で活躍できる人材を育成することを目指す。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

社会学部では、学生の英語能力の向上を目指して、2016年度から英語カリキュラムと英語教育の改革(必修単位数の削減、能力別クラスの編成、コミュニケーション中心の授業内容への変更、テキストの統一と教授内容の標準化など)を行なう。また2016年度には、大学の「教育活性化資金」により、交換留学候補者の英語力の向上を目指して、ベルリッツ・ジャパンと連携して、TOEFL対策講座を開講する。さらに、台湾の高雄第一科技大学との間で、学部間の協定にもとづいた交流を行なう「フュージョン(融合)プログラム」に乗り出す。このような先進的な取り組みを通して、学生の確かな英語力を確保して海外への派遣(交換留学、中期留学、外国語研修等)を容易にするとともに、「フュージョン(融合)プログラム」への参加を促進し、グローバル化する現代社会で活躍できる人材を育成していく必要がある。

3. 達成度評価

評価指標	協定に基づく海外への派遣学生数とフュージョン(融合)プログラム参加学生数の総数	評価尺度	A: 100名以上
			B: 85名以上100名未満 C: 70名以上85名未満 D: 70名未満

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
71名	75名	80名	85名	90名	95名	100名